

北社会ニュース 第46号

2008年8月18日

発行者： 鈴木壮夫

(1) 本日、第265回 北社会

講師：日向寺太郎氏（高36回） 「火垂るの墓」を撮り終えて

昭和20年8月15日、敗戦の日、私は父親の故郷であり、疎開先の栗原郡築館町で生活しておりました。当日の記憶は一切ありません。4才でした。戦争をほとんど意識しない環境でした。たま〜に、はるかかなたの空にB29だったのでしょいか、飛行機の編隊がキラキラと太陽光を反射して飛んでいるのを小高い丘で眺めた記憶は残っています。栄養失調で死んだ「火垂るの墓」の妹、節子も4才だった。“おかっぱ頭”の少女の愛らしさ、周囲にいっぱいいたような記憶がある。野坂昭如氏の原作は「独自の文体」で直木賞受賞の原点になったらしいが、読んでいてともかく疲れる。日向寺氏の映画は素直に“蛍があわたくしく飛び交う”映像を見せていただいた。先月、初めてお会いしただけだが、二高生にはめずらしい“心底からの謙虚さ”が心身にしみ込んでいるご仁と私は感じております。私が上杉山中時代、校舎の前の道路を米軍の戦車部隊が演習のため何十台も轟音をとどろかせ通過、木造校舎は揺れた。二高時代、校舎の前は米軍キャンプ地だった。気持の中では今でも戦後が続いている。「火垂るの墓」を再現させてはならない。モンゴルの留学生、ズラゲレルさんが寄稿してくれましたのでどうぞお読み下さい。

E.ズラゲレル

『火垂るの墓』をみて

映画の監督さんとお会いすることが初めての私、とてもドキドキしながらソウフさんと一緒に岩波ホールへ訪れた。映画の監督さんだと想像すると私の中ではとても「偉い」というイメージがあったけど実際にお会いし、お話をしてみると想像以外でした。とても、素敵なお方だと思った。

その後すぐ『火垂るの墓』を観に行った。映画全体が関西弁だったため言葉が分からなかったりしたけれども映像なので言いたいことや伝えたいことなどが全部伝わってきた。映画の最中にモンゴルで『火垂るの墓』のアニメ版を観たことも思い出した。今回映画化されたのを観てとても面白かったし様々なことを気づかせてくれた。日本人であろうかモンゴル人であろうか関係なく、この映画を観て感じることや考えることが大体同じだろう。だから、日本だけではなく沢山の国でこの映画を上映したらいいなと思った。

(モンゴルにも蛍が沢山いる。小さい時、家の外で蛍をみて遊んでいたことを思い出す)

爆弾や銃などに撃たれてなくても飢餓で死亡することも戦争の被害である。節子の死もこのことを伝えてくれた。今のアフリカで、飢餓で死亡している人は沢山の国でいる。それも戦争であると思う。このように『火垂るの墓』から過去に起きたことと現在起きていることの繋がりをみる事が出来た。どうもありがとうございます。



2008.08.11

(2) 来月以降の北社会

9月16日(火) 講師：庄司恒一氏(高22回) 仙台二高・校長

母校の三年生は108年の歴史で最後の男子だけの学年です。硬式野球部20年振りの宮城県予選準決勝進出、ハンガリーでの国際化学オリンピックでの鈴木裕太君の銅メダル、三船先輩の「文武一道」を実践してくれている後輩達は素晴らしいと思う。赴任されて半年、庄司校長先生から母校の現状をお聞きしましょう。

10月：山本敏晴氏(高36回)の「地球温暖化、しずみゆく楽園ツバル」
(参考情報)写真展：8/20-9/1 pentax forum 新センタービルMB 03-3348-2941
9/6-9/30 百丈ギャラリー 049-226-2616

末尾になりましたが硬式野球部の奮闘(朝日/宮城版 7月25日)

接戦連続、チーム引っ張る

夏

チャンスはいきなりきた。

1回、仙台一の攻撃。2死一、三塁で高橋拓也君(3年)が左打席に立つ。カウント2-2からの5球目。「まっすぐがきた」。狙っていた球種に、迷いなくバットを振り抜いた。しかし、直球だと思っ手を出した球はチェンジアップ。球は直前で軌道をわずかに変え、バットはあえなく空を切った。「やられた」

東北の左腕萩野裕輔君

仙台二・高橋拓也主将

試合後、悔しさを押し殺し、相手の校歌を聴く仙台二の高橋拓也主将。20年ぶりの準決勝進出を果たしたチームを最後まで引っ張ったKスタ宮城



(同)の切れ味鋭い変化球でなく、直球を狙う。準々決勝と再試合の聖和学園戦で、同じ左腕伊藤祐介君(同)の速球を2日間にわたって「経験」したことで、仲間たちとそう決めた。絶対の先制機を逃し、流れは相手に。その裏、逆に先制を許すと、その後も長打攻勢に遭い失点を重ねた。打線は、萩野君の敵し

メートにはげきを飛ばし、集中力が足りないと思えば、練習を中断して意見を言い合った。

夏、その成果が実った。数々の接戦を乗り越えて20年ぶりの準決勝進出。

「ここからいけるぞ」

7回、萩野君が退くとベンチで仲間を声をかけ、打席に入った。会心の手応えを残して二塁手の頭上にはじき返した打球はしかし、飛び上がった二塁手のグラブに収まった。「抜けていれば」

準々決勝前、練習中に球が顔に当たり、5針を縫った。視力も落ちたが、それでも最後までグラウンドに立っていた。コールド負けに悔いは残る。だが、最後の夏は今までない粘りを発揮できた。「ひたむきにプレーできた。みんなに感謝したい」